

Title	ポッツオーリの貝：ゲーテの海
Sub Title	Pholaden von Pozzuoli : Goethes Meer
Author	柴田, 陽弘(Shibata, Takahiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1986
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.48, (1986. 3) ,p.89- 72
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00480001-0174

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ポッツオーリの貝

——ゲーテの海——

柴田陽弘

I

ゲーテが初めてポッツオーリを訪れたのは、ローマですでに面識のあったヴァルデック侯の鄭重な招待に応じた遊山の途上である。ナポリに到着して間もない頃のことであったり。ゲーテの頑固な隠遁的気質は、ローマ滞在中に大分改善されて、自分でもあきれるほど社交的になっている²⁾。ティッシュバインの熱心な懇慫もあって、『イタリア紀行』の記述によれば、渋渋という感じで参加に同意している。ところがその日の遠足はよほど楽しかったらしく、生涯に多大の影響を及ぼすような読書の体験になぞらえて印象を記している³⁾。この日の行程は、まず船でナポリ湾からバーイア湾に到り、バーイアに上陸する。ふたたび船でバーイア湾を横切りポッツオーリに渡る。ついで馬車でソルファターラ(硫気坑)まで浮き浮きと気もそぞろな道中を続け、天下に名立たる奇観を賞でつつ、グロッタ・ディ・ポジリポ(ポジリポの洞窟)を経てナポリに帰着したのである。ポジリポはナポリの西の山の背を貫通する全長 689 m のトンネルで、後年に新洞ができてポッツオーリとの交通が遙かに容易になった。ゲーテはこの日の遊山に先立つ、2月27日にもポジリポ旧洞を訪れている⁴⁾。この日、3月1日のヴァルデック侯の一行には、ローマでもゲーテの関心を惹いた若く美しい婦人が同道している。ゲーテの陶醉はいや増すが、その最中にも抜かりなく見聞メモをとっている。3月のナポリの空は澄み渡り、足元には危険極まりない大地が横たわっている。荒れ寂びた廃墟、煮えたぎる

湯、硫黄を噴き出す洞穴、草木も育たぬ火山岩滓の山山、また反面では、あらゆる死に絶えたものの上に植物が鬱蒼と繁茂している。この日のゲーテの素描が遺っている。題して「ポッツオーリの硫気坑」という。セピアと墨による筆素描で、のびのびとした筆づかいである。画面前方の半ば以上を植物の生い茂る断崖が占めている。絶壁を危険な杣道が細細とめぐっており、頼りなげな柵がかるうじて転落を防いでくれている。右手後方に火山の噴火口の縁らしき山容が望まれ、裾野がゆるやかに広がっている。「古い噴火口の懸崖にも立派な樹の森が生い広がっている」⁵⁾ 様子が、この素描からも覗えるのである。文献は一致してこの作品を賞讃している。ここにはゲーテのイタリアでの美術修業の成果が現われている。ティッシュバインやクニープのような専門家の手本の呪縛を脱して、「すぐれた出来栄え」を示しているが、あくまでも「即興画」であるから、ゲーテのほかの秀作同様に決して果たされることのない約束のようなものとみなして、過大評価してはならないのであるという⁶⁾。さらに同じ日に描かれたと推定される筆素描がある。「海沿いの廃墟」がそれである。おそらくポッツオーリの廃墟と思われる遺跡が右後方に淡く描かれ、手前の小さい入江にはボートを漕ぐ二人の人物が見える⁷⁾。この日帰り旅行で、ゲーテはつぶさに火山活動の大地にとどめた痕跡と、ポッツオーリの古都の形骸とを観察することとなった。ゲーテによれば、「こうして自然の遺物と民族の遺物の間をあちこち右往左往させられ」⁸⁾ たのである。しかしゲーテが、ポッツオーリについてどれほどの自然科学上の観察をしたかについては、それ以上の記録が遺っていない。ゲーテがこの遺跡を改めて考察の対象とするのは、しばらくしてポッツオーリを再訪したときである。

II

ゲーテのポッツオーリ再訪は、同じ年、1787年の5月19日で、この日はナポリからポッツオーリへ直行し、そのまま折り返してナポリへ戻っている⁹⁾。おそらくはポッツオーリの遺物の観察だけが目的だったのである

う。この日に記されたとと思われる断片がある。ポッツオーリのセラールピス神殿についての覚え書きで、紙が傷んで判読できない箇所がある。それはいきなり「そして」と書き出している。「小さな池 ef を形成して、水深は cd である。今は柱の下部 cb が埋もれて、水棲動物はそこまでたどりつけない。その反面、水に漬っている部分 cd を自由に侵食して、空洞を穿った。」柱は白と緑の美しいギリシャの雲母大理石で、外国では食用に供される甲殻類がここに巣食ったのである。こうして指を突っこむことができるほどの穴が穿たれた。さらにこのメモには注記 (NB.) が付されている。「神殿の周囲の、柱がきれいで侵食されていない高さには、まだ灰が積もっている。

硫気坑やモンテ・ヌオーヴォ(新山)等について、どれほど多くのことを言うことができよう。ただひとつかなり確かだと思うのは、火成作用があまり深い要因とはならないということである。ここで深いと私が言うのは、海水面下にかぎるというつもりである。だがこれは余りにも不確かで、私の今までの経験と手間を上廻る詳しい論評を必要とする¹⁰⁾。」

ゲーテはすでにヴェスヴィオ山に登っている。火成作用を観察する材料にはこと欠かない土地にいる。この短いメモに、ゲーテの自然科学上の定見の強さと弱さが如実に示されていて興味ぶかい。これが記されてからおよそ 40 年近い歳月を経た 1823 年に、ゲーテはまたも「ポッツオール神殿」と題する論文をしたためている¹¹⁾。その冒頭はこうである。

「一体、現象を説明するのに、平静な慎重さで真近の自然なものを手にする代わりに、きわめて暴力的な手段を援用する意見ほど奇妙なものはない。」

その例としてゲーテは、v. ホフの『地表の歴史』を挙げている。「超自然な隆起を自在に操る有力な地質学者」が、スウェーデンやノルウェーを地底から浮上させて、この破れかぶれな手段によって説明のつかない困惑から何とか脱しようとしている。さらに頑丈な堰に穴をうがって、地中海の岸辺が 30 フィートもある期間水中に没したのだと主張する。こういう地質学者は、ポッツオール(ポッツオーリ)の神殿がそのいい証拠だという。

ところがこの神殿がディオクレティアヌスの時代の造営であるということだけで、芸術を理解する自然研究者には、この時代以後、海面がそれほど高くもならなかったし、それほど永くその水位を保てたわけでもないことがわかるのである。しかし機械的説明法にとっては、全く自然でないと思うものが不合理であるとは限らないのである。そしてゲーテは、「一步一步前進しよう」と自らを鼓舞する言葉でこの論文の前書を結んでいる。火成論や隆起理論を超自然的空論とみなし、何とか自然な筋道をポッツオーリの柱に観察された現象に見い出そうと苦慮している様がよくわかる。

III

ナポリの西方、硫気坑で名高い半休火山の噴火口の光景を、今日われわれは J. P. ハッケルトの風景画で目の辺りに見ることができる¹²⁾。1788 年製作であるから、ゲーテもほぼ同じ状態の火口風景を見たに違いない。前方に火口縁をなす急傾斜の山脊がせり出し、左右に空を限る樹木が大きく描かれている。日傘をさした男女が、画面中央になだらかに広がる火口原と樹の森林を崖の上から眺めている。急坦な火口縁にも森林はびっしりと這いのぼっている。眼下の火口盆地には家も建っている。禍しい威力を秘めた地底の恐怖は、この牧歌的風景からはまるで伝わってこない。のんびりとした物見遊山の気分が、澄みわたった青空と二人の男女の周りに漂っている。ポッツオーリはこの硫気坑の西北の山裾に位置する古えの都である。その神殿の廃墟と、柱に住みついた穿孔性の貝のことが、余程ゲーテは気にかかっていたらしく、上述の導入部に続けてさらに詳細にこの課題を採り上げている。「建築学上、自然史上の問題」と改めて題を付された比較的長い論文がそれである¹³⁾。どうやらこれには銅版画が添えられて、問題の刻心が一眼で判るように工夫がされていたらしい。残念ながら、われわれはゲーテの文を元にして、想像でこの廃墟の構造を再構成しなければならない。

神殿の遺跡はポッツオーリの北およそ 200 トアース(約 400 m)の海辺に

あり、海面より 15 フィートほど高くなっている。石塀が一辺 25 トアース (約 50 m) の正方形の空間を構成し、神官たちの独居室がその内部をめぐっている。そのため柱廊も含めて内庭には一辺 19 トアースの広さが残されている。中央が丸く高く盛り上がり、急な階段が 4 段ついている。中央部は平均 10.5 トアースの高さで、柱の上に見通しのいい丸い神殿を戴いている。柱の数は 16、内庭を囲んで 36、柱のひとつひとつに彫像が配置されているから、全部で 52 体の彫像がこの広からぬ空間に場所を見つけないといけないのである。柱の均斉、コルニス(軒蛇腹)の部分などが証明しているように、全体がコリント風の秩序を示しているため、なかなか壮観である。この効果は、化粧張から何から高貴な大理石で造られているためにさらに高められている。狭い神官の小部屋も珍しい禊の部屋もすべて高価な大理石造りなのである。ゲートによれば、こうした特徴はすべて、2 世紀のものというよりは 3 世紀のものであることを示している。しかし最も確実な年代測定の基準となる建築装飾の価値について、ゲートはもはや思い出せない。さらに不確かなのは、火山灰やその他の火成作用によって神殿が埋められた時期である。ともかく中世のある時期に埋没したことは疑う余地がない。この神殿は、1538 年の 9 月に千フィート隆起したモンテ・ヌオーヴォ(新山)から 1 時間半のところであり、いまだに活動している硫気坑からは半時間離れているに過ぎない。当地の大地がつねに平穏でなかったことは、ゲートとても認めざるを得ない。さらにゲートは推論を進めて、厚い灰の雨が神殿に降りそそぎ、神官たちの部屋を蔽いかくし、うず高く盛り上がりて丘をなしたと想像する。中庭だけはある高さにまで灰が積もった。そのため中央に窪みが残った。ここは元の地面より 12 フィート高くなったに過ぎない。こうして残った主柱と、柱廊の柱の上部がそこここから突き出るようになった。

禊のために神殿に引き込まれていた小川は、せき止められて池をなしている。発掘された樋や導管は大理石製で、見事な技術を示している。当時巧みに引き込まれていた水は、今も近くを流れている。この池はおよそ 5 フィートの深さで、ポルチコ(柱廊玄関)の柱を洗っていたことであろう。

こうして水中に鳩貝が生じ、水面の高さの雲母大理石を侵食していった。ゲータはこの貝を *Pholaden* と呼んでいる。これはおそらく *Pholadidae*, 学名 *Barnea (Anchomasa) manilensis inornata*, 英名で *piddock* ないし *oriental angel wing* と称されるニオガイ科の貝を指しているものと思われる。殻長 5 cm ほどの白色、薄質の細長い貝で、潮間帯に多く棲息し、泥岩などの岩石に穿孔する性質を持つ。潮間帯というのは干潮線、満潮線の間の海底をいう。

ゲータはここで、かくも永い間この宝庫が人目につかなかったのは何故か、と問いかける。おそらくは扉が厚い藪に蔽われていたためでもあろうし、廃墟の多い地方なので聳え立つ柱などに格別の注意が払われなかったのもあろう。のちにこの遺構が建築家に発見されたとき、慎重な発掘によって復原が試みられることもなく、1752年に始まったカセルタ市の建造のために大理石が流用されてしまった。この空間にわずかな遺構しか見当たらないのも、三本の柱がとりわけ人目を引くのもそのためである。この柱は地上 12 フィートの高さまでは虫喰いひとつなくきれいであるのに、その上 5 フィートのところが鳩貝によって侵食されている。さらに詳しく調べてみると、この生物の穿った窪みは 4 ツオル(約 12 cm)あり、そこから貝殻を採集できたのである。

ゲータは、神殿が発掘と資材の流用後はほとんど触れられることなく現状にいたったであろうと推論している。その典拠として二つの文献の銅版画と一つの素描を挙げている¹⁴⁾。ついでゲータはお得意の教訓的指針を披瀝する。熟達した建築家がこの神殿になすべきことはまだ沢山ある。われわれよりも更に詳しい測量をし、上の文献を便覧してその見取り図を校閲し、周辺に遺る廃墟の残骸を調査し、様式を鑑定して造営の年を割り出し、それに則って個個も全体も専門的に復原することが肝要である。古代研究者はそれを基に礼拝の方式を証明しようとするかも知れない。牛をつないだ青銅の環が地面に遺っている。その血を流した樋がその辺りにあるはずだ。ほら、中央の小高いところに生贄の血を流すための穴があるではないかと。ところがゲータによれば、これらはすべてもっと後代の神秘的

な暗黒の偶像崇拜を示唆しているのである。

ここでゲーテはふたたび鳩貝の穴に話を戻す。他の論者たちは間違っただけから出発して、鳩貝は海にのみ棲息し、海水面が上昇して、柱がある期間海に漬っていたのであるという。このような結論はそのまま逆にして、つぎのように言うことができるだろう。鳩貝の活動が海拔 30 フィート以上のところで観察され、池がたまたまできたことも証明されるのであるから、鳩貝は淡水ないしは火山灰によって塩を含有する水中に棲息し得るはずである。ところが坊主が支配し、騎士が幅をきかせていた時代に、地中海の水面が 30 フィートもせり上がったなどと想像してみるがいい。海岸全体がどのような変化をこうむらなければならないか。どの位の入江が広がり、どれ程の土地が蹂躪されるものか、どれだけの港が埋められてしまうことか。その上、水がこのままの状態でも永い間留まっているものだろうか。そんなことは、どんな年代記にも、どんな記録にも載っていない。ローマ支配以後のどの世紀においても、報告や伝承が完全に破棄されたことはないのである。こうしてゲーテは二つの点を確認する。すなわち、神殿が 3 世紀のものであり、かつて海による氾濫など起こったことはないというのである。

IV

上に紹介した論文「建築学上、自然史上の問題」は、K. v. ホフが 1822 年に刊行した『伝承によって証明された地表の自然な変化の歴史』¹⁵⁾ に触発されて書き上げられたいくつかの論文のひとつである。いずれも反火成論に基づき、ゼムパーによればゲーテの地質学論文の頂点をなすものである¹⁶⁾。

K. v. ホフによると、ボスポラス海峡の決壊で流れ込んだ水が地中海の水かさを増して、神殿の氾濫が起こったのであるという。これはジブラルタル海峡の決壊以前のことである。これを大真面目に詳しく議論した上、神殿の柱は石切場ですでに鳩貝に穴を穿たれていたのかも知れないと推定

してもいる¹⁷⁾。この点ではゲーテの解釈の方がはるかに秀れているため、v. ホフもあっさり兜を脱いで、上述の著作の第二巻にこの見解を採り入れている¹⁸⁾。この第二巻ではピーニとブロックの解釈を検討している。ブロックもゲーテも、鳩貝が淡水貝ではないという点で論理の整合性を見出すのに苦勞している。ブロックは推測された池の生活環境が海に似ていたと仮定する¹⁹⁾。ゲーテは、海面上 30 フィートで鳩貝の活動が見つければ、そして偶然できた池の存在の証明ができるなら、鳩貝が淡水ないし火山灰による塩水に棲息できたであろうと結論づける。この傍証となるのは、ベェダンの実験である²⁰⁾。かれは、海水産と淡水産の生物の化石層が交互に現われることを説明するため、淡水生物を塩水に慣らそうと試みたのであった。

そもそも火山の爆発に付随して起こる急激な隆起を、A. v. フンボルトや L. v. プーフなどの火成論者は、例を挙げていろいろ説明しようとした。そのひとつが 1750 年に発掘されたポッツオーリのセラールピス神殿である。ブライスラックは 1803 年にはもう、同神殿の柱に穿孔した鳩貝について、大地が初め沈降し、のちに隆起したと考えるとうまく説明できると述べている²¹⁾。イギリスの地質学者たちがほとんどおしなべて隆起説を支持しているのは興味ぶかい。J. ホープズ (1829)、ポーリット=スクロウプ (1829)、パビッジ (1834)、スミス、C. ライエルなどである。パビッジは『地質学の諸原理』において同神殿を詳しく論じているが、ライエルはしばしばそれを採用している。その後 F. ホフマン (1833)、デュフレノア (1838)、スカッキ (1849) などの秀れた地質学者たちが類似の解釈をしている。F. ホフマンは独自の文献学的研究によって、この神殿が後期ローマ時代にはすでに埋没しており、中世には水面下にあったことを論証し、モンテ・ヌオーヴォの噴火によってまた姿を現わしたのでであると主張した。地域的な隆起と沈下を想定した点で目新しい²²⁾。こうしてセラールピス神殿は、地質学の教科書には、地盤の変位の証明として必ず登場するようになる。A. ニコリーニは 1838 年から 1846 年にかけて、大地が動いたのではなく、水面が上昇下降したのでであると主張した。E. ズューズもこの錯綜した問題に取り

組んで、ニコリーニと似た結論に達する。すなわち、ポッツオーリの海岸線の移動はこの辺りの平らな火山丘に限定されること、海面が何十年もの間にゆっくりと上昇したのち、1538年のモンテ・ヌオーヴォの爆発の最中か直後に突然逆の運動が起こって、神殿がふたたび姿を現わしたというのである²³⁾。ズュース説はほぼホフマン説に則り、基本的には一致しながら、まだ活動を休止していない一地域の火山における大地の変動としている点に特色があるであろう。

ゼムパーはかくも単純にして明快な解答を得るまでに、仰仰しい舞台装置を引っぱり出して、初めから最短の道をとらなかつたのはなぜかと問いかけている²⁴⁾。これをかれは、18世紀の地質学の担っていた不可避の限界から説明しようとしている。当時の学者たちの見聞の範囲はきわめて限られていたから、局地的な観察を一般化し、地球全体に当てはまる普遍的真理であると主張することが多かったのである。A. G. ヴェルナーの有名な水成論が、もっぱらテューリンゲンの森での観察を普遍化したものだったように、K. v. ホフもゲーテも場所を限定して解釈を求めた。かれらには地中海全体の水面を30フィート以上も上下させるなどというのは、いかにもばかげたことに思われた。しかも現代とローマ帝国の間の時代に。ある地域に海岸線の移動が観察されると、まず地球全体の海の一般的変動を推論する。この結論を受け入れたくない、そもそも海岸の変動が観察されること自体が否定されるのである。時代はちょうどこのような学問の傾向から抜け出ようとしているところである。18世紀の地質学は、地球全体の海水面が徐徐に引いていったとする聖書年代記の呪縛から、まだ完全に免れてはいない。ゲーテもまた意識的にせよ、無意識的にせよ、この魔力に魅せられている。かくて陥没理論は承認されていたのに、隆起理論の普及にはかなりの道程を必要とした。これを主張するには、その度に立証責任を負わされたのである。スカンジナビア沿岸でのバルト海の水面の後退を説明するのに、一地域の隆起だけを持ち出すにはかなりの勇気がいった。ポッツオーリの神殿の解釈においても、局地的な観察を無制限に一般化することが、時代の風潮に最も近かつたのである。逆にブロッキがシチ

リア島のパレルモ近傍のペレグリーノ山でおこなった観察のように、さまざまな高度で鳩貝の穴を発見したと主張したとき、この山が断続的に単独で隆起したという可能性など思いつきもしなかったのは、時代のしからしむるところだった²⁵⁾。造山運動における地域的隆起は一般に承認されていたが、その表象は急激な爆発であって、鳩貝の穿孔した三本の柱を持つ神殿に応用しようなどと考えるのは慮外のことであった。ゲーテは、国全体を隆起させたり、大陸を沈降させるなどという「破れかぶれな手段」²⁶⁾の横行を嘆じている。K. v. ホフは一步進んで、スカンジナビア全体の隆起仮説に対決した。水面の沈下にみえたのは沖積土のためであり、海岸線を決定する境界標とされた岩が岩礁などではなく、岩礁状の漂着物であったこと、北ドイツに散在する漂石と同じく、波と氷によってゆっくりと押し上げられてきたものであることを証明しようとした²⁷⁾。この時代の地球科学は基本的に観察の学として展開し、基礎的なデータを集積しつつあったが、上の概観でも明らかなように、このデータの処理においてさまざまな憶説が唱えられることになった。ゲーテは過激な論者ではさらさらなく、ただ暴力的な火山活動を避けようとする性向から、できるだけ隆起理論に反駁しようとする点で一貫していた。「火成論者と水成論者の玄武岩生成説を和解させるための調停の提案」²⁸⁾の末尾で、両派の折衷案を示した後に、「調停者によく起こることであるが、願わくば両派の不興を買いたくないものである」と書いている。かれの科学論文はほとんどこの調子で貫かれている。上述の「建築学上、自然史上の問題」でも、「この事例でも他でもそうであるが、わたし自身が納得したらそれでいいので、この矛盾の世の中で他人をも納得させようなどという使命感を覚えないのである」と記している。ゲーテの科学上の卓見が、着想時よりかなり遅れて印刷に付されるのは、この辺りに原因があるのかも知れない。

V

J. ヴァルターは、現代の地質学の本質をなしている二つの要素がゲーテ

には欠けていると述べている。すなわち隆起理論と時間がそれである。²⁹⁾ ゲーテは同時代人の多くと同じように、膨大な地質学上の時間を表象し得ず、同時的化学的に岩石が生成したと説明したがる傾向があった。隆起理論については、火成論とのかかわりから「暴力的な手段」であるとして、これを避けようとしたことはすでに述べたとおりである。ゲーテのみならず、18世紀のかなりの自然研究者たちが、火成論の不連続な飛躍的要素を「革命的」であるとして退けた。ゲーテはくりかえし「破れかぶれな手段」を非難している。外観の異なる別個のものも、すべからく内的な必然的連関の連鎖としてとらえることができるというのが、終生ゲーテが抱きつづけた信念だった。顎間骨の発見へとかれを導いた生物学研究における基本原理は、無機物の世界にも通底するというのがいつわらざる確信となっていた。その意味で、火による暴力的作用よりも、水によるゆるやかな生成に親しみを覚えたのは自然のなりゆきである。A. G. ヴェルナーを総帥とする水成説は、岩石は水溶液の結晶化により、地殻の層理構造は水の作用によるとするものである。この論理の斉一性において、世界観的首尾一貫性において、火成論の不均斉と論証の飛躍をはるかに凌駕していたから、ゲーテをはじめとして、多くの自然研究者たちはこれに魅きつけられた。水成説は火成説よりも後から構想されたが、キリスト教世界を永年支配してきた聖書の創世史と矛盾しない点でもきわめて有利だったといえる。ゲーテは火成論を自然の営みの外にはみ出たなじめないものとして扱いつつ、水成論の基礎にどれほど火成論の折り合いをつけるか苦心している。自らの地質学に火山の力を無視することができなかったからであるが、その折り合いのつけ方に独自のものがあるのである。

1786年9月3日未明、ひそかにカールスバートを抜け出したゲーテは、一路イタリアをめざし、14日の1時頃ヴェローナに着く。その途上、コルマンから下ってほどなく、規則正しく板状に割れた斑岩の地域に踏み入る。「フェルバーはこれを火山の産物とみなした。しかしながらそれは世の中が頭に血をのぼらせていた14年前のことであった。ハックナーはすでにそれを嘸いのめしている」³⁰⁾ と軽く火成岩をいなしている。同19日

にはヴェローナからヴィツェンツァへの途上であって、「ヴィツェンツァに近づくと、ふたたび丘陵が北から南へと高まって、平野を限っている、この丘陵は火山性のものだそうだ」³¹⁾と記している。これが同旅行記で唯一の火成岩の記述である。ゲーテの火成作用の経験は、ほぼこれ以降のローマとナポリとシチリアに限定されている。1787年2月19日の謝肉祭のローマの項に、「ヴェスヴィオ山は石と灰を噴き出している、夜には山嶺が灼熱に輝くのが見える。活動する自然が熔岩の流れを与えたまわんことを！この偉大な対象をもわがものとせんまでは、ほとんど待ちきれない思いである³²⁾。」ローマの滞在が終りに近づくにつれ、ヴェスヴィオ山を遠望しては、期待を新たにしている。この待望の活火山の初登山は3月2日におこなわれた。折悪しく曇天で、峯の三分の二は雲に蔽われている。噴火口への道は湯気につつまれ、自分の靴先も見えない位である。ハンカチを口にあてて、熔岩の塊りの上を進むが、案内人の姿も見失って立往生する。そのため噴煙の少ない他日を期して、この日は下山している³³⁾。再登山は3月6日に企てられた。火山を嫌悪しているティッシュバインも同行する。ゲーテは火成作用に対する画家の気持を忖度している。「たえず自分を破壊し、あらゆる美的感情に宣戦を布告するような恐しい醜悪な堆積は、かれに不快きわまるものと思われたであろう³⁴⁾。」これは取りも直さずゲーテその人の感情でもあった。かつてヴェスヴィオの灰に埋められたポンペイやヘルクラネウムでの見聞も、狭隘な街路や掠奪による荒廃に不快の念を覚え、渚に近い料亭で鬱を散じたりしているのである³⁵⁾。さてこの日、ゲーテは円錐峯に達して壮大な景観に心を奪われる。「まず轟轟たる山鳴りが噴火口のはるか底の方から響いてくる、それから大小の石が、火山灰の雲に包まれて、何千となく空中に投げ出される³⁶⁾。」慎重に一行は噴火の間隔を測定し、その間隙をぬって噴火口に致ろうと計画する。ゲーテと案内人の一人がこの冒険を敢行する。小石と灰が降りそそぐ中を巨大な奈落のふちに辿りつき、噴煙の隙間から岩壁の亀裂をのぞき見る。こうしてゲーテは「新旧の熔岩に特別の注意を払うことができたのである³⁷⁾。」この二週間後、3月の20日にヴェスヴィオの熔岩流の噴出の報

を聞いて、ゲーテは三度目の登山を行う。澄み渡った空の下の濛濛たる蒸気の雲の中から、熔岩が噴き出ている様を初めて目の辺りにするのである。「ある事柄について千たび聞いたにせよ、その特色は直接観てみなければ解るものではない」³⁸⁾と感動を述べている。葡萄酒によって元気をつけ、一行は地獄の奇観を見てまわる。帰路の日没と夕景の美しさが、熔岩の凄絶をさらにきわだたせる。美と醜との極端な対比は互に相殺し合って、結局無感動をしかよび起こさない。「ナポリ人が神と悪魔とに挟まれていることを感じないなら、きっと彼らは別の人種に相違ない³⁹⁾。」

同年の10月に故郷に送った手紙にゲーテは記している。

「丘陵の全くすばらしい連なり…は火成作用によりますが、その古い運動は平静の中に移行し、住民はすでに何千年も平和な場所を喜んでいます」⁴⁰⁾

イタリアでの火成作用の体験の記述は、ほとんど一致してゲーテの特異な対応を浮き彫りにしている。火山の破局が根本的にはきわめて平穩に推移する現象であって、地殻の根底をゆるがす大変動をもたらすものではないということ、火成論を水面下にもとめようとする事、これがゲーテの基本的態度である。ここで「ポツツオーリ」のメモを思い起こしたい。「ただひとつかなり確かだと思うのは、火成作用があまり深い要因とはならないということである」と述べ、その要因を「海水面下にかぎりたい」と続けるのである。「海面下の火成作用」というような火と水との協同作業は、イタリア滞在以前からのゲーテ独自の表象であった。もともとゲーテは、この時代の通説である「物質としての火」の理論、すなわち「熱素」説を受け入れていたことを考えねばならない。熱素を含む水溶液を想定すれば、この表象は決して矛盾していないのである。その地球生成論においても、「内なる火は、放出された火よりも、水と仲が悪かったようには思われぬ」⁴¹⁾と記している。また別の個所で、「玄武岩はすべてを覆っていた火山の海の所産」であり、「大規模の熱い燃えつきた沈殿」によつたと述べている⁴²⁾。これらの記述から30年以上を経た1823年3月16日に、ゲーテは一文を草している。「アレクサンダー・フォン・フンボルトの『さ

まざまな地方における火山の構造と作用について』⁴³⁾と題されている。冒頭に水成論者の当惑が述べられる。「しっかりと基礎づけられているように思われ、全世界に広がっていたヴェルナーの学説の50年にも及ぶ学徒にして誠実な信奉者が、今その静かな確信を揺がされて、正反対の説を四方八方から聞かされる派目に陥入ったときほど、困惑の大きいことは考えられないだろう。」

花崗岩は今まで水成論者にとって確固たる揺ぎない基盤であり、かれはかつて水に覆われ、次第に水の引いていった大地の上を矛盾のない安定した気持で逍遙していた。火山の暴力に直面しても、活動は続いているが、表面的に過ぎない自然の遅生まれの子供の作用としか思われなかった。ところが事態は様相を異にしてきている。スウェーデンやノルウェーは時折ではあっても海から相当隆起したのだという。ハンガリーの鉞山はその宝を地底から奔出した熔岩に負っており、チロルの斑岩はアルプスの石灰岩を砕き、白雲岩(苦灰岩)を高所に押し上げたものであるという。もとより遙かな原始時代の作用であり、その運動をいかなる眼も目撃したこともなければ、ましてや、その暴威をいかなる耳も聞いたことはない。

ここで一体、古い学派の一員はどう思うだろうか? ひとつの現象から他への移行、飛躍して用いられた帰納法とアナロジー、断定、これらを誠実に信念にもとづいて受け入れるべきである。

ついでゲーテはフンボルトの火成論に称讃を惜しまない。今まで気ままに仮定されていたと思ったものが、しっかりと根拠づけられている。ぼんやりと暗示されていたものが関連を得ている。さらにゲーテは、火成論者のように考えてみるのも次の時代にとって有意義なことであると社交的にことばを結んでいる。

フンボルトのこの火成論の著述について、ゲーテは別の所でも論評を加えている。それに添えたメモが興味ぶかい⁴⁴⁾。「熱い源泉は水の侵入によって異なる岩石を産み出す」とか、「島と海辺の火山はその生成を海水に負っている。アメリカの最高の火山はその根源を、ゆっくりと融けつづける万年雪に負っているのではなからうか?」そしてさらに「水の作用も否

定できない」と記し、「素質は地層と大地の割れ目の中にある。海中と海岸の火山は、高山の融けつづける永遠の雪から生じた水によって生成する。」

水と火との定かならざる結合の表象は、80年代の地球生成論から一貫している。あくまで水成論に固執しながら、高山の万年雪を持ち出してわずかに軌道修正を図っている点が目新しいのである。

VI

「地質学上の問題とその解決の試み」⁴⁵⁾の中で81歳のゲーテはこう書いている。

「悟性に何の可能性も与えず、想像力に何の実行性も与えずに、結局機械的手段として山岳をやたらに隆起させるこの騒ぎは一体何なのだ？ こんなものは概念も心象も与えないただの言葉、まづい言葉にすぎない。」

たとえ地球規模からすれば取るに足りないことであっても、ゲーテにとって、千フィートも山が隆起するなどというのは表象できない「ただの言葉」なのである。18世紀に一般的だった表象のように、おそらく一晩かそこから千フィートも隆起したと考えたに相違ない。ゲーテによれば、太古に地質学上の革命など存在しなかった。突然の隆起による大変動が、地球全体に広がっていたこともないという。ゲーテはつねに自然全体を統べる一つの原理を表象している。有機物であれ、無機物であれ共通の傾向によって生命を吹きこまれていると主張する。地球全体をひとつの生命体とみなすガイア仮説を先取りしているかのようである。このような性向から、暴力的手段による地質学上の変化を忌避し、隆起理論を否定した。G. A. ウェルズは、このようなゲーテの特性が威力を発揮し、地質学上の貢献にかれを導いた例として次の三つを挙げている⁴⁶⁾。その一は、すでに紹介したセラールピス神殿の鳩貝の解釈、その二は、ルーゼンブルクの花崗岩塊の混沌たる節理の解釈、その三は、北ドイツの漂石の解釈である。これについてはかなりの異論が予想されるが、ここでは触れない。いずれにせよ

ポツオーリでのゲーテの思索は、ゲーテの地質学上の原理のみならず、かれの思想世界の特色を端的に示唆している点で興味ぶかい。ゲーテのイタリア滞在中の素描には数々の海が登場するが、奇妙にも一つの傾向に支配されている。ゲーテの海はほとんど例外なく鏡のような海である。しばしば月や日没がこの平らな海面に映っている。入江や湾が描かれることも多いが、ほとんど風も波も和んでいる。激浪は存在せず、平穏で柔和な自然のみが憩っている。これにはやはり、ゲーテの自然観と気質が関与しているとみなければなるまい。ポツオーリの海もそのようなものとして表象されている。海に大規模な革命は起こらず、一地域の現象には局地的な原因が想定されるのである。柱は近くの活火山の影響によって12フィートの火山灰に埋まり、神殿を流れる小川は堰き止められて深さ5フィートの池をつくる。そしてここに鳩貝が棲息したのである。この解釈にはすでに述べたように誤謬があるにせよ、大筋として学問的解釈の正道をいっているのは、この場合むしろ怪我の功名といえなくもない。ついでながらゲーテの建築学上の推論について一言しておこう。D. ブラウンスによれば、セラーピス神殿は実は神殿ではなく、海棲動物を保管する水槽であったという。この説を採れば、海岸線の移動に関するこれまでの仮説はほとんど意味を失なうことになる⁴⁷⁾。さらに現在では、セラーピス神殿と呼ばれている遺跡は紀元1~2世紀のローマの市場であったというのが定説になっている⁴⁸⁾。それゆえ、ゲーテの建築学上の苦心の仮説は無効になってしまうのである。

「自然の業はつねに述べられたばかりの神のことばである」⁴⁹⁾ というのはゲーテのある手紙の中の一節であるが、感覚で観察したものの根底に総合としての通底原理を読みとろうとするのが、ゲーテの一貫した態度だった。ゲーテにとって「最も自然なもの」は「手近」にあり⁵⁰⁾、火成論のような「新しい世界創造の物置小屋」⁵¹⁾ではなかったから、火の国にありながら、手近な「最も自然なもの」を排除する結果になった。直接の観察から得られる多くの仮説を解釈の操作でしめ出したところに、ゲーテの自然研究者としての限界と強靱さを見ることができる。

註

- 1) Goethes Werke. Hamburger Ausgabe. Abgek. HA. Bd. XI S. 186 („Italienische Reise“ Neapel, den 1. März) u. S. 183 (den 25. Februar)
- 2) a. a. O. S. 186
- 3) a. a. O. S. 187
- 4) Goethe Handbuch. Bd. IV 2. Aufl. Stuttgart 1956 S. 26; HA. Bd. XI S. 186
- 5) HA. Bd. XI S. 187; Corpus der Goethezeichnungen. Bd. II Leipzig 1960 S. 37 Nr. 87; W. Hecht: Goethe als Zeichner. Leipzig 1982 邦訳: 相良憲一他訳『素描画家としてのゲーテ』国際文化出版社 1983, 102-103頁。238頁。
- 6) Corpus. a. a. O. S. 37; A. Hirth: Goethe als Zeichner. Eine Studie unter besonderer Berücksichtigung der Italienischen Reise. Ungedruckte Habilitationsschrift. Jena 1946 S. 61, S. 112
- 7) Corpus. a. a. O. S. 38 Nr. 92
- 8) HA. Bd. XI S. 187
- 9) Goethe Handbuch. a. a. O. S. 27
- 10) Goethe. Die Schriften zur Naturwissenschaft. Leopoldina-Ausgabe. Abgek. LA. I. Abtlg. Bd. I S. 165
- 11) LA. I. Abtlg. Bd. II S. 267 f. Pozzuol=Pozzuoli.
- 12) J. Göres (hrsg.): Goethes Leben in Bilddokumenten. München 1981 S. 130 Nr. 212
- 13) LA. a. a. O. S. 268 ff.
- 14) LA. a. a. O. S. 271. Antichità di Pozzuolo. 1768; Voyage pittoresque, ou description des Royaumes de Naples et de Sicile; eine Zeichnung von Herrn Verschaffelt 1790.
- 15) K. v. Hoff: Geschichte der durch Überlieferung nachgewiesenen natürlichen Veränderungen der Erdoberfläche. Bd. I 1822
- 16) M. Semper: Die geologischen Studien Goethes. Leipzig 1914 S. 198
- 17) v. Hoff: a. a. O. S. 455 ff.
- 18) v. Hoff: a. a. O. Bd. II 1824 S. 203 ff.
- 19) E. Suess: Antlitz der Erde. Bd. II 1888 S. 498 Anm. 46
- 20) Gosselet: Constant Prévost. S. 125; M. Semper: a. a. O. S. 198 u. S. 337
- 21) K. A. v. Zittel: Geschichte der Geologie und Paläontologie bis Ende des 19. Jahrhunderts. München u. Leipzig 1899 S. 440
- 22) F. Hoffmann: Neues Jahrbuch für Mineralogie. 1833 S. 437

- 23) E. Suess : a. a. O. S. 476-494
- 24) M. Semper : a. a. O. S. 199 f.
- 25) Brocchi : Leonhard, Taschenbuch 1822, Bd. III S. 904
- 26) Goethe : a. a. O. Bd. II S. 267
- 27) v. Hoff : a. a. O. Bd. I S. 416 ff.
- 28) Goethe : LA. I. Abtlg. Bd. I S. 191
- 29) J. Walther : Goethe und das Reich der Steine. In : Goethe als Seher und Erforscher der Natur. Halle 1930 S. 276 ff.
- 30) HA. Bd. XI S. 38
- 31) HA. Bd. XI S. 52
- 32) HA. Bd. XI S. 175
- 33) HA. Bd. XI S. 188 f.
- 34) HA. Bd. XI S. 192
- 35) HA. Bd. XI S. 198 f. S. 204 f. S. 212 f.
- 36) HA. Bd. XI S. 193
- 37) HA. Bd. XI S. 194
- 38) HA. Bd. XI S. 215
- 39) HA. Bd. XI S. 216
- 40) Brief an Carl August vom 23. Okt. 1787
- 41) LA. I. Abtg. Bd. I S. 96
- 42) LA. I. Abtg. Bd. I S. 190
- 43) LA. I. Abtg. Bd. II S. 257 f.
- 44) LA. I. Abtg. Bd. II S. 296 f.
- 45) LA. I. Abtg. Bd. II S. 409 f.
- 46) G. A. Wells : Goethe's Geological Studies. In : Papers Read Before the Society 1964-65. S. 119 f.
- 47) D. Brauns : Das Problem des Serapeums von Pozzuoli, Leopoldina 1888 Bd. XXIV ; K. A. v. Zittel : a. a. O. S. 440
- 48) Encyclopædia of World Art. N. Y. : McGraw-Hill, 1963 (Translation of the Italian Encyclopædia Universale Dell'Arte) Bd. VIII. S. 616 u. S. 709 f. Bd. XII S. 513 復原図については図 I (Bd. VIII S. 616) 参照。
- 49) Brief an Herzogin Luise vom 28. Dez. 1789
- 50) LA. I. Abtlg. Bd. II S. 267
- 51) LA. I. Abtlg. Bd. II S. 409

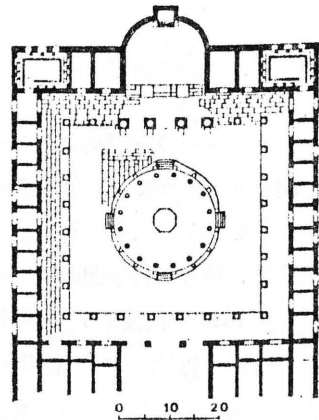


図 I 神殿復原図